「シェイクスピア」を読む

全集第二巻収録の「シェイクスピア」は　シェイクスピアの
四大悲劇の最後の作品「マクベス」を論じたものである
この「マクベス論」成立　及び　この「マクベス論」に関して
恆存自身が　後日　論評した内容について　まず
知っておくことで、「シェイクスピア」をより良く読む
ことができるかも知れない。

「マクベス論」の成立と経緯

初稿　昭和十三年　大學院在學中

「批評」第六十號　昭和二十二年四月
・「マクベスについて」と題して
・「ブラッドレー教授よ……」の形に書き直す
・文中のせりふ引用部分は逍遙訳か

「マクベス」解題　昭和三十六年十一月記
（新潮文庫所収　昭和四十四年八月刊）
・文中のせりふは福田訳に
・文中の引用は原語ではなく訳語に
　自身の「マクベス論」について解説

西欧作家論　講談社　昭和四十一年一月
・「シェイクスピア」と題して
・「批評」と同形式

全集第二巻　昭和六十二年三月
・文中せりふ福田訳
・文中引用は原語のまま
　覚書にて　自身のマクベス論に言及

各章の要点について

（前文）

ブラッドレー教授の批評態度に生理的不満を感ずる

客観的批評

批評の公平性　学者としての中立性．

ぼくはただ　マクベスがぼくの精神のどの部分に衝撃を
与へたかを、そしてそのあとでは、もはやシェイクスピアの「マクベス」は
存在せず、ぼくのマクベスしか存在しなくなってしまった　いきさつを
語りたいと思ふだけである．

文学としての批評といふものか？

（1）

「マクベス」は失敗作である

主人公は卑小陋劣　とるにたらぬ小人物

事大主義が基調となってゐる．

マクベス自身はプロットの傀儡にすぎず　美しい詩句や
切迫するせりふは、ほとんど作者のもの．

←

速さの印象をあたへるプロットの展開、とひとつのムードを
表現する詩とに分裂してゐるのだ
詩はプロットに置き忘れられ、観念は想像力の
働きを抑圧し、みづからを主張する．↓ 5章の
終末の二段落へ

（2）

シェイクスピアが、「マクベス」において意図したことの秘密を
かぎださうとするのだ．

完成ではなく失敗が作者の真意を　よりよく裏切り
示す　といふ意味での　失敗作だと考へる

ブラッドレー教授は　問題の核心にふれてはゐる

その五箇所の引用はしかし　どれも踏み込みが
足りない　つまり　シェイクスピア＝ブラッドレー教授で
あり、これはブラッドレーのせいではなく　シェイクスピアの
作劇が失敗してゐると　恒存は言ってゐるのか．

（3）

「ハムレット」劇の主題について考へる

「小さな現實が強大な個性をとりこにする」

これこそが「ハムレット」「リア王」「オセロー」の主題なのだ

外部的な運命（chance）のからくりが　内部的な宿命（doom）の足どりを　わなにかけたとも言ひえよう

ハムレットは、傷つきながらも　自己の個性の眞實性を信じ

彼自身のものとして宿命の存在を實感してゐた。

（4）

ぼくは「マクベス」から近代理智のひとつの態様を描き出さうとしてゐるのである。その　デクリネイションの一様相を、

マクベスは、自己のうちに高くかかげるべき個性の眞實性をもつてゐないのである。

マクベスの一生は　自己の宿命と闘ふのではなく、ただ運命と驅引することですごされる。

「マクベス」は、血統の純粋性と、精神の高貴性とへの憧憬と復讐の物語だ。

運命は「両義語」でマクベスをあやつつてきて　最後の瞬間　かれを放りだす。ここではじめて　マクベスはひとりになる　かれは地位も権力も運命も、すべて似非なるものを　ふるひおとす

マクベス最後のことばに見られる自己意識と自己主張とは　まことにすさまじいものがある

（5）

シェイクスピアに関して

解放されて仕へるべき何物をも持たぬ自我の不安は「マクベス」をとほしてかれのうちにしのびこんでゐるのだ

解放さるべき個性の實體とは何か。王冠や笏を取り去つてみれば　はたしてひとはなにものであるか

このとき、マクベスは、はじめて孤獨を予感する。個人の権威とは、その生涯の業績とは、所詮　影のごとく　幻のごとく、頼りなくはかない、ものでしかない

が、ルネサンスに反逆したシェイクスピアもまた　ルネサンスの子として、みごとに自ら予感した危機を乗り超えてゐる

彼の想像力こそ　それを可能ならしめたものに他ならない。

覺書 二（全集二）

この巻に収めたものはⅡⅢに關する限り、第一巻のⅡと似たやうなもので、別に何も言ふことはない。ただⅡの「イギリス文學の可能性」「理解といふこと」「告白といふこと」「自己劇化と告白」「ことばの二重性」、Ⅲの「敎壇を奪はれた敎師」「日本人の思想的態度」、これら七つの論文は、それぞれⅡⅢの他の論文とは多少、あるいは大いに違つてゐる。自分で言ふのもいい氣なものだが、いづれも解り易くなつてゐるやうに思ふ。「藝術とはなにか」は私が生涯に試みた唯一の書下し長篇評論であり、要書房主前田善子さんの勸めで要選書の一つとして書いたものである。意外にも中村光夫に褒められ、その後も、自分の評論集その他、色ゝな形で出版されてゐる。それは七分通り私の藝術論であると同時に、三分はしばしば論じて來た私の人間觀でもある。これらはいづれも昭和二十五年から二十六年にかけて書かれたもので、その時期が私の轉換期であるといへよう。確かに書くものが解りやすくはなつた、だが、私自身の課題となつた例の二元論、集團的自我と個人的自我の問題が、亡靈のやうに様ゝに姿を變へて私の心に立入り、「あゝ、またお前に出遭つたな」といふ思ひを、始終くりかへしてゐた。それは一生私に附纏ふであらう。

西洋の作家、あるいは作品を論じたもののなかで、「シェイクスピア」、「ロレンス」、「サルトル」、「チェーホフ」、「エリオット」などは、その出來榮えはとにかく、私でなければ書けないものを書いたと思つてゐる。「シェイクスピア」は同じ全集の解題として書いた「リア王」の構成について論じてゐるものの方が私にはいいやうに思はれる。それは私以外の誰も言はなかつたことだからだ、と自らさう言つた瞬間に自慢の鼻をへし折られる、シェイクスピアについて新發見はありえない。大抵どこかのシェイクスピア學者が既にどこかで同じやうなことを書いてゐるからだ。

ただ、私のマクベス論はハムレットとの對比に急なあまり作品「マクベス」を無視してゐる。ドーヴァ・ウィルソンは多くの「ハムレット」論がハムレットを作品「ハムレット」の外に連れ出して論じてゐると非難したが、それと同じ過ちを犯して、マクベスを強引に作品「マクベス」の外に引張り出し、つひにマクベスの失脚を作品「マクベス」の失敗と斷じてしまつたのだ。後年「マクベス」を譯して、初めてシェイクスピアの想像力の偉大と詩の美しさとに驚歎した。さう言へば、これまた自惚にならうが、私の譯したシェイクスピアの作品のなかでも恐らく一二を爭ふものであり、逍遙、鷗外を遠く引き離してゐると言つたら笑はれようか。その原作の「マクベス」を失敗作と斷定したのは最初にこれを書いたのが昭和十三年、大學院の學生だつた時で、若氣の至りとでも言ふほかはない。戰後、それを「批評」に發表した時も、些細な語句の修正だけに限られてゐて、作品の心髓に迫るには至らなかつた。それほど自信があつたと言へようか、今はもう何も言はぬ、平にお赦し願ひたい。